

はじめに

本書は、初版以来、学習・受験の好伴侶はんりょとして高校生諸君に愛用されてきた『要説 徒然草』を全面的に改めたもので、新版の特色は次の諸点である。

- ① 判型・文字の大型化 読みやすくするために、大判（A5判）に改め、文字を大きくした。
- ② 教科書の本文 現在使用されている主要教科書に収録された章段を増補するとともに、必読の文章を網羅するよう努めた。
- ③ 教科書の設問 教科書の研究課題・設問の解答・解法を、「語釈と文法」「文法の要点」「研究」などの欄に、可能な限り収録した。

凡例

一、本文は、原則として『日本古典文学大系 方丈記・徒然草』によったが、読みやすくするために、句読点・引用符号・漢字・かなづかいを適宜改めた。またできるだけ多く読みがなをつけて読みやすくするとともに、原文の左わきには、かたかなで読み方を示した。

二、解説は、その章の内容を簡潔にまとめたものであるが、必要に応じて、解釈・鑑賞の手引きとなるようなことからも加えた。

三、口訳は原文に即してわかりやすい訳文を作ることにとめた。原文になく訳文に補った箇所には（ ）をつけて明

示し、原文と訳文とを比較対照するのに便利なようにした。

四、**読解の要点**には原文を読み解くうえのヒント・手引きになるような語句・語法・文脈上の要点を解説した。古文の
実力をつけるには、いきなり訳文を読むのではなく、できるだけ自分の力で考えてみるのがたいせつである。それ
ゆえ、この「読解の要点」を手がかりとして実力を養成されることを切望する。

五、**語釈と文法**は、平易なことで、しかもできるだけ詳しく説くことを心がけた。抽出した語句には、必要があれば
まず「」の欄内に品詞名を示して、次に語義を説いた。重要語や、一語で多くの意味を持つ語については、そのす
べての意味・用法をあげて古文解釈の基礎知識が身につくように心がけた。

六、**文法の要点**では、解釈上むずかしくはなくても、文法的に検討しておかなければならないような語句をとりあげて
説明した。特に文法的な基礎事項はなるべくこの欄で扱い、十分な解説を加えることにした。

七、右の五、六の説明にあたっては**文法参照**の指示をして、相互の関連をはかり、できるだけ学習上の便宜をはかる
ように意を用いた。また、とくに重要で応用範囲が広いと思われる語句は大きな文字にして□で囲みをつけて注
意をうながしてある。

八、**研究問題**とその解答を、重要な章に添えた。問題は入試問題中から厳選するとともに、新作問題をも加えたから、
これによって各自の実力をテストされたい。

九、付録の「京都付近地図」は、『徒然草』のみならず、他の古典を読む上にもきわめて重要なものなので、これを載
せた。また、さし絵もできる限り多くその箇所に入挿した。

本書の作成にあたっては、野村 嗣男先生に多大のご尽力をいただきました。

目次

解 説	九	さて冬枯れのけしきこそ	三
① つれづれなるままに	一三	つごもりの夜いたう暗きに	五
② いでや、この世に	一五	よろづのことは	七
法師ばかりうらやましからぬものは	一八	飛鳥川の淵瀬	九
人は、かたち・ありさまの	二〇	京極殿・法成寺など見るこそ	一〇
ありたきことは	二三	静かに思へば	一三
③ あだし野の露	二五	人の亡きあとばかり	一五
④ 家居のつきづきしく	二九	年月へても	一七
後徳大寺大臣の	三三	思ひいでてしのぶ人	一八
⑤ 神無月のころ	三五	雪のおもしろう	二〇
⑥ 同じ心ならん人と	三九	九月二十日のころ	二二
⑦ いづくにもあれ	四三	手のわるき人の	二四
⑧ 人はおのれをつづまやかにし	四七	朝夕へだてなく	二六
をりふしの移りかはるこそ	五一	名利に使はれて	二八
⑨ 灌仏のころ、祭のころ	五三	うづもれぬ名をながき世に	三〇
七夕祭るこそなまめかしけれ	五五	ただし、しひて知を求め	三二

19 ある人、法然上人に……………〔第三九段〕…………… 六〇

20 五月五日、賀茂のくらべ馬を……………〔第四一段〕…………… 六二

21 あやしの竹の編戸の……………〔第四四段〕…………… 六六

御堂の方に法師ども参りたり………………………… 六六

22 公世の二位のせうとに……………〔第四五段〕…………… 一〇〇

23 老来たりて……………〔第四九段〕…………… 一〇二

24 応長のころ、伊勢の国より……………〔第五〇段〕…………… 一〇五

25 亀山殿の御池に……………〔第五一段〕…………… 一〇九

26 仁和寺にある法師……………〔第五二段〕…………… 一一一

27 これも仁和寺の法師……………〔第五三段〕…………… 一一四

くすしのもとにさし入りて………………………… 一二六

28 家の作りやうは……………〔第五五段〕…………… 一二八

29 久しく隔たりて……………〔第五六段〕…………… 一二九

30 道心あらば、住む所にしも……………〔第五八段〕…………… 一三三

そのうつはもの………………………… 一三四

31 大事を思ひ立たん人は……………〔第五九段〕…………… 一三七

32 真乘院に、盛親僧都とて……………〔第六〇段〕…………… 一三三

この僧都、ある法師を見て………………………… 一三三

33 延政門院いときなく……………〔第六二段〕…………… 一三五

34 筑紫に、ながしの押領使など……………〔第六八段〕…………… 一三六

35 名を聞くより……………〔第七一段〕…………… 一三八

36 世に語り伝ふること……………〔第七三段〕…………… 一四〇

かつあらはるるをも顧みず………………………… 一四二

ともかくにも………………………… 一四四

37 蟻のごとくに集まりて……………〔第七四段〕…………… 一四四

38 つれづれわぶる人は……………〔第七五段〕…………… 一四四

39 今様のことどもの……………〔第七八段〕…………… 一四六

40 何事も入りたためさましたる……………〔第七九段〕…………… 一四六

41 法顕三蔵の……………〔第八四段〕…………… 一五二

42 人の心すなほならねば……………〔第八五段〕…………… 一五二

43 下部に酒飲ますることは……………〔第八七段〕…………… 一五六

44 ある者、小野の道風の書ける……………〔第八八段〕…………… 一五六

45 奥山に猫またといふもの……………〔第八九段〕…………… 一五六

46 ある人、弓射ることを……………〔第九二段〕…………… 一五七

47 牛を売る者あり……………〔第九三段〕…………… 一五七

またいはく、「されば、人死を………………………… 一五七

48 高野の証空上人……………〔第一〇六段〕…………… 一六九

49 高名の木のぼり……………〔第一〇九段〕…………… 一八一

50 双六の上手といひし人に……………〔第一一〇段〕…………… 一八四

51 友とするにわろきもの……………〔第一一七段〕…………… 一八六

52 改めて益なきことは……………〔第一二七段〕…………… 一八七

53 花はさかりに……………〔第一三七段〕…………… 一八七

よろづのことも始め終はりこそ………………………… 一九〇

よき人は、ひとへに………………………… 一九四

さやうの人の祭見しさま………………………… 一九五

何となく葵かけわたして………………………… 一九六

かの棧敷の前を………………………… 二〇一

54 身死して財残ることは……………〔第一四〇段〕…………… 二〇五

55 悲田院の堯蓮上人は……………〔第一四一段〕…………… 二〇七

56 心なしと見ゆる者も……………〔第一四二段〕…………… 二〇三

世を捨てたる人の………………………… 二〇四

57 御隨身秦の重躬……………〔第一四五段〕…………… 二〇八

58 能をつかんとする人……………〔第一五〇段〕…………… 二一九

59 西大寺の静然上人……………〔第一五二段〕…………… 二三三

60 世に従はん人は……………〔第一五五段〕…………… 二三四

春暮れてのち夏になり………………………… 二三五

61 一道にたづさはる人……………〔第一六七段〕…………… 二三七

わが知をとりいでて………………………… 二三九

62 年老いたる人の……………〔第一六八段〕…………… 二三三

63 さしたることなくて……………〔第一七〇段〕…………… 二三四

64 相模守時頼の母は……………〔第一八四段〕…………… 二三六

65 城陸奥守泰盛は……………〔第一八五段〕…………… 二四一

66 吉田と申す馬乗り……………〔第一八六段〕…………… 二四三

67 よろづの道の人……………〔第一八七段〕…………… 二四五

68 ある者、子を法師になして……………〔第一八八段〕…………… 二四七

この法師のみにもあらず………………………… 二四九

されば、一生のうち………………………… 二五〇

京に住む人、急ぎて東山に………………………… 二五三

69 人のあまたありける中にて………………………… 二五三

けふはそのことをなさんと……………〔第一八九段〕…………… 二五五

70 夜に入りて物の映えなし……………〔第一九一段〕…………… 二五六

71 達人の人を見るまなこは……………〔第一九四段〕…………… 二六三

愚者の中のはぶれだに………………………… 二六五

72 人の田を論ずる者……………〔第二〇九段〕…………… 二六六

73 平の宣時の朝臣……………〔第二一五段〕…………… 二六八

74 後鳥羽院の御時……………〔第二六六段〕…………… 二七二

75	よき細工は……………	[第二九段]	…二七四
76	園の別当入道は……………	[第三一段]	…二七五
	おほかた、ふるまひて……………		…二七六
77	よろづのところがあらじと……………	[第二三段]	…二八〇
78	人の物を問ひたるに……………	[第三四段]	…二八二
79	主ある家には……………	[第三五段]	…二八五
80	丹波に出雲といふ所……………	[第三六段]	…二八七
81	八つになりし年……………	[第二四三段]	…二九〇
付録			
	語句索引……………		…二九三
	京都付近地図……………		…三〇一

解 説

作 者

『徒然草』は兼好法師が書いたものである。兼好は出家前の名を卜部兼好といい、出家後は音読して兼好といった。生没年ははっきりとはわからないが、だいたい弘安六年（三六三）ごろに生まれ、観応三年（二五三）以後のころ、七十歳ぐらいで死んだらしい。父は卜部兼頭といい、兼好はその三男として生まれた。卜部氏は神官で京都の吉田神社の社務職を世襲した家がらなので、後年吉田兼好とも呼ばれた。二十歳ころ堀河家に仕えた後、朝廷に出仕し、官は藏人・左兵衛佐に達したが、三十歳前後に出家して比叡山の横川にこもった。ここを出て後はだいたいの京都に住み、隠者―隠遁者として生涯を送った。晩年は仁和寺近くの双が岡に住んだらしい。『徒然草』のような随筆を書いたほか、歌人としても有名で、頼阿・浄弁・慶運とともに和歌四天王と呼ばれて活躍し、その歌は『続千載集』以下の勅撰集にもはいる、また家集として『兼好法師集』が伝えられている。

成立と諸本

『徒然草』は長い期間にわたって書かれたものを延元三年（二三〇）ごろ、兼好が五十歳を過ぎたころに、大部分は自身が編集して今の形にしたものであるといわれる。このことは各段の連絡から見ても言うことができそうである。書名は最初の段の「つれづれなるままに……」という文からとられた。早くからかなり広く読まれたものらしく、諸種の本が伝わっている。古いものでは永享三年（一四三）に歌僧として有名な正徹がみづから筆写したいわゆる「正徹本」があり、他に流布本として慶長十八年（一六三）刊の、烏丸光広の奥書のある「烏丸本」その他がある。江戸時代になると、一般の人々の常識を養うものとして広く読まれ、註釈書も多く出た。明治以後もこの状態は変わらない。

時代環境

兼好の生きた時代は鎌倉時代の末期で、それはわが国の歴史の上でもとくに目まぐるしい動乱の時代であった。すなわち兼好が生まれたといわれる年は、蒙古襲来という大事件のあった弘安四年からわずか

1

つれづれなるままに

[序段]

解説 全巻の序文で、この書物を書いた時の態度や感想を述べたもの。自分ながら変に狂気じみて思われると言っているのは作者の謙遜で、著作などの場合はこういう謙遜の態度をとるのが、昔から今に至るまでの常識である。他の古典にもこうした例は多い。―なおこの「つれづれなる」状態について深く考えた意見が第七五段に見える。

つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて、
心につりゆくよしなしごとを、そこはかとな
く書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

口訳 する事もなく退屈で心さびしいのにまかせて、
一日じゅう硯に向かつて、次から次へと心に浮かんで消
えてゆくくだらないことを、とりとめもなく書きつけてみ
ると、(自分ながら)じつに変で、狂気じみているような
気がする。

読解の要点 「書きつくれば」で「已然形+ば」の形に気をつける。「あやしうこそものぐるほしけれ」で、「こそ」の結びに形容詞がくる場合の考えかたをおぼえておく。

語釈と文法

つれづれ

「徒然」とい
う漢字をあて
る。するしごともなく物足りず、たいく
つなありさま。名詞としても、形容動詞の
語幹としても用いる。

◆心にうつりゆく―この「うつり」は
「移り」ととれば、「それからそれと心に浮
かんで来る」という意。「映り」と解する説
もあり、それだと「心という鏡に次々に映っ
てくる」という意になる。前説に従ってお
く。

「よし―なし―こと」の三語が合したも
の。「よしなき―こと」といえば二語であ
る。「よしなし―こと」と形容詞の終止形か
ら名詞に続くのは、古い形である。

◆「ままに」―「ままかせで。………まよっ
て。………に従って。」「まま」は形式名詞。
「だ」は格助詞。

よしなしこと

は由緒。理由。全部で一語の複合名詞。

◆ものぐるほしけれ―狂気じみている。
作者が自分の著作(あるいは著作の心理)

◆日ぐらし―一日じゅう。

は由緒。理由。全部で一語の複合名詞。

作者が自分の著作(あるいは著作の心理)

を謙遜して言ったもの。

文法の要点

◆つれづれなるままに—
この文節は「書きつければ」にかかると考えるのが自然であるが、「むかひて」にかかるとする説もある。

◆書きつければ—「已然形+ば」の形。この形には三つの用法がある。①順態の確定条件(原因・理由)を表し、「ので」「から」と訳す。②恒時条件を表し、「……するといつも……する」「……とかならず……と」の意。③前に比して原因結果の関係

が少なく、軽く次へ続けて偶発的事件の前提を表す意。「……すると」「……と」と訳す。ここは③で「書きつけてみると」と訳す。

あやしうこそものぐるほしけれ

「こそ」は強意の係助詞。「じつに」「まこと」などと訳すのが当たる。係り結びを成して下を已然形で結ぶ。「ものぐるほしけれ」は形容詞「ものぐるほし」の已然形。この形を、形容詞「ものぐるほし」に、過去の助動詞「けり」の已然形「けれ」がつ

いたものと見誤る人が多いから注意。だから「狂気じみていた」と訳すのは誤りである。「けり」は連用形接続だから終止形には続かない。なお「あやしうこそものぐるほしけれ」は二つの文節から成る述語で、これに対する主語が省略されている。普通は「自分の心が」「自分が」と考えられているが、「書いたものが」「書きつけることが」「書く態度が」などと考える説もある。「あやしうこそ」は連用修飾語で、「ものぐるほしけれ」を修飾する。

形動・体 名 格助 副 名 格助 六四・用 接助 名 格助 カ四・極・体 名(極) 格助 形ク(極・用) 形動・体 名 格助 副 名 格助 六四・用 接助 名 格助 カ四・極・体 名(極) 格助 形ク(極・用) 書きつければ、あやしうこそものぐるほしけれ。

研究

- 1 兼好は『徒然草』をどんな心持ちで書くと書いているか。
- 2 「あやしうこそものぐるほしけれ」とは、どんな心を述べているか。

解答

- 1 静かでひまな生活を幸いとして、思いのままの筆をふるう心持ち。
- 2 「自分ながらじつに姿で、狂気じみているような気がする。」という心を述べていて、自分の著書を謙遜したことばでもある。

2

いでや、この世に [第一段]

解説 人間として希望するものについて論じたもの。第1節は、身分、家がらについて述べ、第2節は高位の僧侶をあげ、第3節に人物こそがたいせつなのであると説き、第4節にりっぱな人物たるに必要な学問技芸の内容を具体的に示している。

【一】 いでや、この世に生まれては、願はしかるべきことこそ多かれ。みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさならなり、ただ人も、舎人など賜はるきははゆゆしと見ゆ。その子・うまごまでは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、ほどにつけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口をし。

口訳 いやもう、この世に生まれてきたからには、(だれしも)こうありたいと思うはずのことがたくさんあるようだ。(まず家がらのよいということであるが、その中で)天子さまの御位は、(望んではならないものであるから、ここに問題とするのは)まことに恐れ多い。(天子さまご自身に限らず)皇族のご子孫まで、われわれ一般の人間の血統ではないことは、まことに尊いことである。(これもここで問題とすべきことではない。次に人臣として)最高位の摂政・関白の御ありさま(のすぐれていること)はいうまでもなく、これ以下の普通の貴族でも、朝廷から護衛の供人などをつけていただく身分の人は、たいしたものだと思われる。そういう人の子や孫の代までは、たとえ落ちぶれてしまっても、やはり品がある。(しかし)それより以下の家がらの者は、その家がらに家からに依じて、運よく出世をし、得意然としている人も、自分でいそうつまらない。